

200901003B

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究

総合研究報告書

主任研究者 秋田 喜代美

平成22(2010)年 3月

目 次

I. 総合研究報告	
保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究	1
秋田喜代美	
II. 分担研究報告	
1. 日本版 SICS 「子どもの経験から振り返る保育プロセス」尺度の開発	
1) 保育自己評価ツール（SICS：Self-evaluation Instrument for Care Settings）の教育思想と 国際的な利用動向	5
秋田喜代美	
(資料1) SICSの鍵概念 門田理世	
2) 日本版 S I C S 幼児版の作成	22
芦田宏	
(資料1) 子ども達のエピソードから始める自己評価法実施のてびき	
3) 日本版 S I C S の幼児版利用と3歳未満児版作成	59
芦田宏	
4) 日本版 SICS（幼児版）の国際的評定者間一致率の検討	64
秋田喜代美	
5) 台湾からみる日本版 SICS と台湾版 SICS	66
幸 曼玲	
2 「子どもの経験から振り返る保育プロセス」（日本版 SICS）の研修・教育利用	
1) 撮影園での園内研修実施の分析	72
門田理世	
2) 保育者の自己評価記録から	76
門田理世	
3) SICSを用いた園内研修の工夫	80
箕輪潤子	
4) 保育者養成大学の学生指導への利用	86
野口隆子	
3. 保育の質と評価に関する国際動向	
1) OECD 諸国における保育の質の動向に関する研究 1	89
秋田喜代美	
2) . OECD 諸国における保育の質と評価に関する動向 2	95
鈴木正敏	

3) イギリスにおける保育の質の研究動向に関する研究 門田理世 (資料1) イギリスにおける保育の質の向上: Ofsted (教育水準局) の機能を通して	101
4) アメリカ合衆国における保育の質の研究動向に関する研究 1 鈴木正敏 (資料1) アメリカ合衆国における保育の質の研究動向	109
5) アメリカ合衆国における保育の質の捉え方及び研究の動向 2 門田理世	116
6) アメリカクラスルーム評価システム (CLASS) の検討ー日本版 SICS との比較 野口隆子	128
7) 各国の保育の質の研究動向に関する研究 鈴木正敏 (資料1) 保育の質をどう保障するか	135
8) 日本における保育の質の研究動向に関する研究 箕輪潤子 (資料1) 日本における「保育の質」	139
9) 日本における保育の質の評価と日本版 SICS 箕輪潤子	144
10) 日本における保育評価の伝統と台湾における保育評価の動向 小田豊	150
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	155
IV. 研究成果の刊行物・別刷	156

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
総合研究報告書

保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究
研究代表者 秋田 喜代美 東京大学大学院教育学研究科教授

研究要旨 本研究プロジェクトの目的は、第1に保育の質に関する国際的政策や学術研究動向を調査すること、そして第2にその動向をふまえて、日本の園文化に応じた形で今後長期的に使用できる保育環境の質尺度（幼児版、3歳未満児版）を開発すること、第3にそれを保育研修に利用することでその方法の有効性や活用法を開発検討することである。ヨーロッパ、アメリカ、東アジア各国の保育の質の評価動向を検討し、日本の保育文化にふさわしいように尺度の変更修正を加え、夢中度を中心とした幼児版については尺度開発、DVD作成、園内研修ならびに養成校での指導への活用と検証、台湾との共同研究による外部からの日本版評価と比較文化研究、ベルギーでの開発者による日本版尺度の信頼性の検討を行ない、本尺度が有用かつ信頼性の高いことが示された。また3歳未満児版に関しては研修を通して乳児では安心度を中心としたDVDが必要であるとの観点からDVDの作成を行なった。これによって乳児版の研修利用までは至らなかったが、ほぼ当初の計画どおりに研究を実施し、一般の保育所で誰でも使用可能なように、ブックレット「子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のよりよい保育のために」（DVD付き）を刊行することができた。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

秋田喜代美・東京大学大学院教育学研究科教授

小田豊・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所理事長

芦田宏・兵庫県立大学環境人間学部教授

鈴木正敏・兵庫教育大学学校教育研究科准教授

門田理世・西南学院大学人間科学部准教授

野口隆子・十文字学園女子大学人間生活学部准教授

箕輪潤子・川村学園女子大学教育学部准教授

以上7名

研究協力者

淀川裕美・東京大学大学院教育学研究科博士課程院生

委託研究協力者

幸 曼玲 台北市立教育大学教授

1. 研究目的

本研究の目的は、保育課程・環境・文脈

の質をふまえ、子どもの情緒の安定性及び遊びへの知的没頭との関連から評価する保育環境の質尺度について検討することである。保育環境の質の向上と保育者の資質向上のための研修のあり方は保育所保育指針の改定等においても議論されており、生涯に渡る発達の基礎となる健全な乳幼児育成にとって非常に重要な今日的課題である。この尺度は、ECERSなど従来から使用されている英米型質尺度と異なり、子どもを主体にした保育過程の質に着目しており、ベルギーで開発されOECD諸国で広く使用されているSICS (Well-being and involvement in care process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings) の着想に基礎をおくものである。この尺度は、目前の子どもの事実として子どもが安定し遊びこめているかどうかを保育環境における要因から検討しており、継続的な使用と形成的な改善を促すことを目的としている点、DVDを教材として作成する点、保育の場における研修利用に適している点で独創的である。また東アジアで使用できるものとして、日本及び台湾との共同研究を通じて開発をおこない、アジアにおける汎用性を検討する。

2. 研究方法

3年間の研究期間において、以下のような方法で尺度の開発及び検討をおこなった。

(1) 欧米・東アジア等、日本を含め諸外国における保育の質の概念や尺度に関する文献収集と海外の研究者との検討会議を実施。

(2) DVD作成のため、保育所における観察と撮影を実施した。さらにそれらを用いた2園の保育所における研修や保育者を対象とした本尺度に対するインタビューならびに質問紙調査を実施し、尺度の改訂をおこなった。

(3) 保育者を対象とした7箇所における研修及び1園での園内研修を実施し、尺度の信頼性と妥当性を検討するとともに、実践を通じた事例研究によって有効性を検討した。

(4) 保育者養成大学2大学の学生に質問紙調査を実施し尺度の有効性を検討した。

(5) 台湾の台北市立教育大学辛曼玲氏の協力により、台湾版尺度と研修の実施、日本版との比較検討をおこなった。

(倫理面への配慮)

1 本尺度の開発にあたっては、オリジナル尺度の開発者であるベルギー Leuven 大学 Ferre Laevers 教授から学術研究において本尺度をもとに日本版を作成し、日本国で使用することについて承諾を得、またベルギーでその尺度を普及している Kind end Desin にも了解を得て実施している。また日本側で修正した点を説明をしその点に関する了解も得た上で出版をしている。

2 研修用 DVD 作成のためのビデオクリップ撮影に際しては、乳児版に関しても子どもならびに保育者の撮影に関して、学術研究上の使用であることを園として承諾を得た上で実施した。また開発した内容に関しても、担当園に事前に報告し、研究発表等での公開の承認を承諾書によって得ている。

3 一般向けに幼児版を冊子として作成公刊する際には、DVD 撮影園、表紙等の写真掲載を園ならびに保護者に承諾を得た上で発刊し、その旨出版物にも記載した。

3. 研究結果及び考察

平成19年度には、ヨーロッパ、アジア各国における保育の質評価政策動向をおさえるとともに、ベルギーリューベン大学 Ferre Laevers 教授との研究会議を通して、乳幼児の保育課程を踏まえた保育環境質尺度が日本の保育文化に有効であろうと判断され、日本版を作成した。これをもとに兵庫県及び福岡県の保育所2園においてパイロットスタディをおこない、尺度について園長・保育者にインタビューならびに質問紙調査を実施したところ、保育環境における文化的相違や日本において課題となる家庭との連携についての指摘、クラスだけでなく園全体としての質の向上につながるフォームへの改善を示唆する指摘があり、項目内容の追加修正をおこなった。平成20・21年度には、さらに国際比較研究の知見をまとめるとともに、日本版の保育環境の質尺度を作成し、日本保育学会におけるシンポジウム発表や有識者との研究会を通して保育研究者からの意見を聞き、最終的な改訂を実施し、ブックレット及びDVDを作成した(名称「子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—」)。それらを利用しながら保育者を対象とした7か所における研修、1園(神奈川県)における園内研修の実施と、保育者養成大学2大学における学生を対象とし有効性の検討をおこなった。

また平成21年度には幼児を対象としたブックレットとDVDを元に乳児版DVDを作成した。台湾との共同研究において、台北市立教育大学辛曼玲氏の協力により、台湾版尺度作成と日本版尺度との比較検討をおこなった。台湾では研究者チームによりSICSと日本版尺度を元に台湾の状況を踏まえた尺度の修正がおこなわれた。また日本と台湾で撮影されたビデオを分析し、評定方法の一致ならびに撮影視点の検討、尺度を用いた研修を実施した。台湾では政策として幼稚園・保育所における外部評価が実施され基本視点もすでに構築されている。共同研究で開発された尺度は、台湾の外部評価の標準化訓練ツールになり得る点、そしてさらに活動への知的没頭を捉える観察視点を保育者に提供し、幼児の学習の経験に関する具体的なデータを提供できる点において有効性が示唆された。

4. 結論

保育環境の質尺度について、日本の保育・幼児教育における歴史や文化をふまえた尺度として開発したという点で非常に意義があるだろう。研修に参加した保育者や継続的に園内研修を実施した園からは、本尺度の利便性によって促される保育者の自発的な学びや個々人の視点の広がり、園全体の質の向上を示唆する声があがっている。特に初任やベテラン、非常勤保育者など、経験や立場に関わらず共通の観点に立って保育を検討することが可能であることも示唆された。保育者養成大学の学生においては、DVDや尺度項目を用いることで保育や子どもに対する理解が容易になることがわかった。今後保育所における保育課程との関連を検討しながら本尺度を用いた研修やアクションリサーチ等を積極的に実施することで、継続的な検討を行い、長期的な保育者の専門的発達や保育の質向上における有効性、さらには他の尺度との関連性を検討することが重要である。一方で、日本の保育文化において評価そのものに対する抵抗感も示唆されており、子どもの発達に関する視点と保育者の自己評価の方法と理解についてさらに啓蒙的活動をおこなっていくことの重要性が示唆された。今後さらに台湾との継続的な共同研究を実施しつつ、アジア諸国を中心とした共同研究に発展させていくことが求められる。

5. 政策への反映

今日、保育の長時間化や子どもの種々な能力の低下が懸念され、認定子ども園をはじめとする新たな保育施設の設定と保育環境及び保育課程の検討、保育の質の向上と保育者の資質向上のための研修のあり方などが課題となっている。第三者評価による保育評価は設備等ハードウェアの検討であるのに対し、本研究は保育の文脈に応じ個々の子どもの姿を中心にして保育の実態を継続的に省察することができる自己評価尺度として開発されており、全国的な保育者の資質向上を図る際に有効であろう。また、欧米諸国を中心に保育の質尺度の開発が進む中、アジア諸国ではそれらをそのまま導入している場合が多い。乳幼児の保育・教育分野において国際的研究が進む中、本研究では、歴史的に日本の保育所保育指針に影響を受けた台湾との共同研究を進め

ており、アジア諸国への乳幼児の保育・教育分野での支援に活かせるものであろう。

6. 研究発表

① 論文発表

- 1) 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 2007 保育の質研究の展望と課題 東京大学教育学研究科紀要 47 289-305
- 2) 箕輪潤子 2007 砂場における山作り遊びの発達の検討 保育学研究45 (1) .42-53.
- 3) 秋田喜代美 2008 園内研修による保育支援:園内研修の特集と支援者にもとめられる 専門性に注目して 臨床発達心理実践研究, 3, 35-40
- 4) 秋田喜代美・泉千勢・榊原智子 2008 てい談 世界の保育をみる 保育の友 56(6), 11-25
- 5) 蒲池房子・倉掛秀人・鈴木正敏 2008 特集(座談会)自己評価で保育士はどう変わるか 保育の友 56 (11) 10-25
- 6) 箕輪潤子 2008 幼児の砂遊びの発達過程—遊びの構造と展開に注目して 発達研究 22 , 41-149
- 7) 秋田喜代美 2009 「国際的に高まる「保育の質」への関心」BERD, 16, 13-17

② 学会発表

- 1) 門田理世 2007 撮影することと視聴すること 第4回日本質的心理学会発表論文集 62-63.
- 2) Kadota, R. 2008 Early Childhood Teacher Education Programs in Japan. Proceedings of the 2008 Taipei Municipal University of Education International Symposium; Reconceptualizing Early Childhood Education - A Cultural Approach, p. 55-77.
- 3) Kadota, R. 2008 Preschool teachers' perceptions on recording practices. Paper presented at the American Educational Research Association, New York.
- 4) 野口隆子 2008 保育の場におけるメン

タリナー保育者の専門的発達と学び—
日本発達心理学会第19回大会発表論文集,
p192

- 5) 野口隆子・芦田宏・小田豊・天野珠路・
辛曼玲・門田理世 2008 「保育の質」
と評価を考える(シンポジウム発表) 日
本保育学会第61回大会発表論文集,p121
- 6) Akita, K. 2009. 4 Early Childhood
Mathematics Teaching in
Japan: Participation in
Mathematical Activities in
Everyday-life Settings 17. 4. 2009
Chicago, Erikson
Institute of Education
- 7) 鈴木正敏・増田まゆみ・埋橋玲子・芦田
宏・小田豊 2009 「保育の質」と自己
評価について考える(シンポジウム発表)
日本保育学会第62回大会発表論文
集,p127
- 8) Akita, K 2009. 10 Improving the
Quality of Early Childhood Education
in Japan: National Educational Policy
Reform and the Development of
Process-Oriented Self-Evaluation
Instrument' 19. 10. 2009 Shanghai
International child development and
education forum.

③著書

- 1) 秋田喜代美・西山薫・菱田隆明(編)
2007 今を生きる保育者論 みらい
- 2) 秋田喜代美 2007 幼稚園教師の資質向
上と自己評価 全日本私立幼稚園幼児教
育研究機構(編) 私立幼稚園の自己評価
と解説 フレーベル館 6-10
- 3) 小泉敏昭・秋田喜代美・山田敏之(編)
2007 幼児期の科学する心を育てる 小学
館
- 4) 鈴木正敏 2007 幼・保・小連携のカリ
キュラム 田中享胤他(編) 教育課程・
保育計画総論 ミネルヴァ書房
- 5) 奥井智久・芦田宏(編著) 2008 新子
どもと環境 理論編 三晃書房
- 6) 奥井智久・芦田宏(編著) 2008 新子
どもと環境 実技・実戦編 三晃書房
- 7) 友定啓子・小田豊共(編著) 2009 「保育
内容 人間関係」 光生館
- 8) 小田豊・神長美津子(編著) 2009 「教育課
程総論」 北大路書房
- 9) 現代保育研究所 編 2009 やってみよ

う! 私の保育の自己評価 フレーベル館
(著者増田まゆみ・柴崎正行・西村重稀・
石井哲夫・石井章仁・大嶋恭二・小沼肇・
倉掛秀人・三溝千景・高辻千恵・守山均・
矢藤誠慈郎・鈴木正敏)

- 10) 小田豊・芦田宏(編著) 2009 新保育ラ
イブラリ 保育内容 言葉 北大路書房
- 11) 秋田喜代美・野口隆子(編著) 2009 新
保育シリーズ 保育内容 言葉 光生館
- 12) 箕輪潤子 2009 若手保育者の指導力ア
ップ4 遊びがもっと魅力的になる! 3・
4・5歳児の言葉がけ~砂場編~ 明治図
書
- 13) 「保育の質」研究プロジェクト(秋田喜
代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口
隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊(2010)
子どもの経験から振り返る保育プロセス
—明日のより良い保育のために 研修用
ブックレット+DVD— 幼児教育映像制作
委員会

④報告書

- 1) 保育環境の質尺度の開発と保育研修利用
に関する調査研究 厚生労働省科学研究
費補助金政策科学総合研究事業 平成20
年度総括研究報告書 主任研究者秋田喜
代美 2007年
- 2) 保育環境の質尺度の開発と保育研修利用
に関する調査研究 厚生労働省科学研究
費補助金政策科学総合研究事業 平成20
年度総括研究報告書 主任研究者秋田喜
代美 2008年
- 3) 保育環境の質尺度の開発と保育研修利用
に関する調査研究 厚生労働省科学研究
費補助金政策科学総合研究事業 平成21
年度総括研究報告書 主任研究者秋田喜
代美 2009年

7 知的財産権の出願・登録状況

特に出願や登録はない。

保育自己評価ツールの根底となる **Experiential Education (E X E)** の教育思想と 国際的利用

代表研究者 秋田 喜代美 東京大学大学院教育学研究科

本研究の基本思想となる子どもの経験にもとづく教育の思想として、安心・安定と没頭・夢中を中心とする理念がカールロジャースやデューイの思想をとり入れながらも実践者との園内研修をもとにして、子どもの実存に焦点を当てて Laevers 教授が提唱したものであり、具体的に明日の保育の改善につながるという特徴を有していること、またこの思想がヨーロッパ各国においてそれぞれの文脈に応じた形式で力点が異なったり、利用がなされていること、また幼児のみならずその後小学校以後の18歳までにこの思想が適用可能であることを明らかにした。

A 研究目的

保育過程の自己評価ツールとして OECD で高く評価され、日本での保育実践にも通じると判断され、日本版を開発しようとする SICS の中核をなしているのは、ベルギーリューベン大学の Ferre Laevers 教授による経験にねざした教育と言う思想である。そこでまずこの思想がどのような特徴をもつものであるのかを明らかにすること、第2にはこの思想ならびに尺度を他の国ではどのように使用しているのかを、SICS に関連して発刊されている文献にもとづき明らかにすることにある。

B 研究方法

Ferre Laevers 教授が執筆刊行している論文、本、DVD 等をすべて収集した。また国際的活用に関しては、SICS を用いた国際プロジェクトに関する研究報告を各国の研究者の視点から執筆した資料を収集した。特に国際プロジェクトは、Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) *Involvement of*

children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. として刊行されており、ドイツ、ポルトガル、英国、フィンランド、ニカラグアとの共同研究報告がなされている。そこで、その本を中心に文献の検討を行なった。また英国では、特にこの SICS と呼ばれる尺度のうち *involvement scale* と Laevers による教師のスタイルとして開発された ASOS (*Adult Style Observation Schedule*) を用いて、就学前（英国は5歳より就学のため）3, 4歳児の子どもの保育の質に関する研究プロジェクト EEL (*Effective Early Learning*) がイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドにわたり展開され、質の改善に関する報告が報告されている。そこでこれらの文献も検討した。

またあわせて2009年2月に Ferre Laevers 教授ならびにその教授とともにアクションリサーチを行ってきた元保育者で

あり現在はこの SICS を中心に保育者の研修等を担当している Julia Moons 氏を招聘し、日本において実際にミーティングを行うことによって、最近の研究の展開に関して直接面接を行うとともに、資料の収集を行った。

C. 研究結果

1 EXE (経験に根ざした教育)

1) 本理念の位置づけと歴史的展開

OECD (1998) は生涯学習基盤強化のねらいから、保育の質の向上とアクセス機会の増大を目的として各国政府が動き始めていることを報じている。そして保育カリキュラムとして代表的な5つのカリキュラム(4カリキュラムとワークショップ開催国スウェーデン1)を選んで、Starting Strong Network 参加国メンバーとの間でワークショップを実施している。その4つが、イタリア レッジョエミリア、ニュージーランド テワリキ、アメリカのハイスコープ、そして当科学研究費プロジェクトが取り上げている Ferre Laevers ベルギー リューベン大学教授による Experiential Education (以下では経験に基づく教育と呼ぶ)である。

EXEの基礎は1976年にベルギー リューベン大学で Ferre Laevers によって主張されてはじまった。実践志向の研究を通しての開発や普及を通して、ベルギー フランダース地方とオランダに最も大きな影響を与え、すでにこの教育学に基づく本とビデオが18冊、1年に750回の現職教育がこの観点から行なわれるようになってきている。この思想は当初から幅広い場に適した質の評価と実践における質の改善をもとめて生まれたものである。その鍵は教育の質

を、現在行なっていること(文脈)がある次の地点(成果)を導くものになっているのかどうかと私たちが感じることを助けるような指標を開発するという点にある。その基本的仮説は、いかなる教育の場においてもその質を電あするための決定的な方法は、子ども・学習者がいかに「その場が情緒的に居心地よく(幸せに感じ)あるかの程度」と「没頭(集中)の水準」に焦点をあてることであるという点である。これは効果的な教育の文脈を作り出す時の試金石となる。それが経験に基づく教育がいかに子どもを没頭されるかという過程であり、この方法がなぜ実践者に魅力的であり、彼らのもてる力を引き出すかということにある。しかし近年ではそれが教育の成果にまで広げられて考えられるようになってきているが、質評価のための概念やツールも実践へのガイドラインもいずれの水準においても、その中心となるのは「自らによる構造化(self-organization)と新たなことを始めようとする精神」「社会的有能性」「物理的世界を理解すること」そしてすべての主題において「深い水準での学習」であるという生きる技能の観点から発展させてきている。

この思想と評価が広がったのは1991年からであり、これらの基本ツールが英語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、フィンランド語、ポルトガル語、スウェーデン語、スペイン語に順に翻訳されてからである。そしてこの経験にもとづく教育の議論の場となったのがヨーロッパ幼児教育学会である。

特に画期的進展をみたのは1995年に、イギリスにおいてEEL(Effective Early Learning)として紹介導入され(Pascal &

Bertram, 1995) この時イギリスでは 3000 人以上の実践者と 5 万人の子どもたちが英国全土の質の改善のために E E L 方略として携わった。E E L の幼児養育自己評価システムは 2 つの E X E (経験にもとづく教育) のツールからなる。その一つは Leuven Involvement Scale (子どもの集中尺度) であり、もう一つは大人の関わりスタイル観察 (Engagement Scale) である。英国の各地域の教育担当局がこの分野ではこの E X E の理念を過去 5 年間に保育施設の施設長や助言者、教育行政関係者が 2 5 0 0 を超える場でいれている。

その後 2004 年以後もさらに大きく展開し、オランダ、イギリス、アイルランド、ドイツ、スペイン、ポルトガル、フィンランド、スウェーデン、ギリシア、レトランド、クロアチア、キプロス、南オーストリア、南アフリカ、エウアドール、ザンビア、ニカラグア、ベトナム、スリナム等 20 カ国を超える国で学ばれ、この教育思想に基づく保育の質の評価が実施されてきている。

また幼児教育だけではなく、1994 年に開発された L I S - Y C は英国小学校において特別な支援を要する子どもの教育の質の評価にも Royal National Institute for the Blind にも使用されてきている。

2) 経験にもとづく教育プロジェクトの基本概念：文脈、過程、結果のレベルについての概念と経験

この考え方は 1976 年 5 月に 12 人の F l e m i s h のプレスクール教師たちが 2 人の教育コンサルタントの援助を受けながら自分たちの実践を批判的に省察しようとするところから始まった。このアプローチは「experiential 経験的」とは子どもがその教

育場面に参加しそこで生きるとは何を意味しているのかをその一瞬一瞬を密に記述しようとする意図を意味している。この注意深い観察と子どもの経験の「再構成」が一連の満足のいかない状況に光をもたらすことになる。子どもの発達を支える機会はいかに多すぎて実際には活用されていない。何十のセッションの中で教師が出会う問題の可能な解決を語り合い実践の中でそれらを行い、その経験を省察する。それによって次第に教師たちは現在の実践からいかにして変化していくかに気付いていった。そしてそれが E X E となった。それはフランダース地方とオランダでの小学校教育でもっとも影響力を持つモデルの一つとなった。この基本概念は、チャイルドケア、特殊教育、中等教育、教員研修等、学習と教師の専門性開発が行なわれる場所ならどこでもできるものである。

A 質の探究

ケアと教育の場における質とは何か？親、カウンセラー、校長、カリキュラム立案者の視点からみれば、それぞれに期待する教育の文脈や教師の行動がある。インフラストラクチャや備品、活動内容、教育方法、教育スタイルなどなどである。政策や政府の視点から見ればより直接的に教育の成果にもとづきそれを捉えるだろう。通常の評価においてはケアと教育のシステムは、この意味でよりよい結果を強制されている。このような状況の中で、子どもとともに生き、働く教師が立たされている。その中で彼らにとって最もよいものは何か。シンプルなガイドラインと効果的であることを受け入れたとしてもその 2 つの目的を一緒にいかにつなぐのか？

B 教育過程への注目

この問いに対する、EXEプロジェクトの最も大きな寄与は、文脈と成果というこの2つのアプローチの間におかれている質の指標を同定することである。リンクがかけられている点を指摘することができる。それが今行なっていることの文脈がどこへむかうのかを導くかどうかを理解するのを助ける概念である。就学前から成人教育に至るまでいずれにおいても「情動的な居場所感」の程度と「没頭」の水準の2次元によって教育の質に焦点をあてることができる。まず我々が幼児養育に行ったときに知りたいと思うのは子どもたちが安心して自発的に行動的生き生きと自信に満ちて行動しているかである。居場所感とは、身体的ニーズ、やさしさや愛情のニーズ、安心や明晰性のニーズ、社会的に認められたいというニーズ、有能と感じたい、生活に意味や道徳的価値を見出すことのいずれもが満たされているかである。

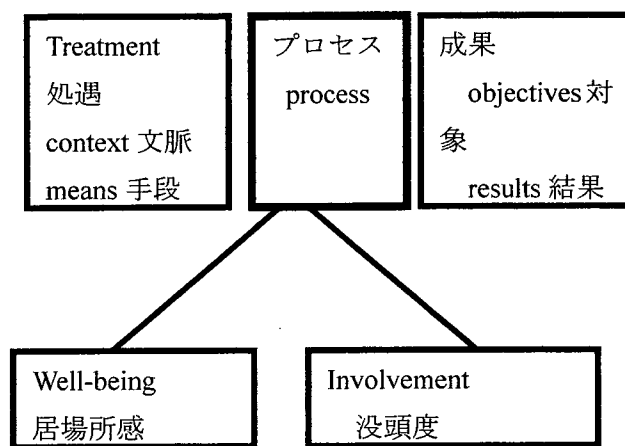
第2の基準、没頭は発達過程と関連しており、大人が子どもにとって喜んで没頭できるような挑戦的環境が準備しているかである。よい学校は情動的な居場所感と肯定的風土に注意を払っていることだけではなく、一方で没頭できるよう促す課題を準備している。没頭は特別な行動や発達水準と関わるものではない。赤ちゃんでも大人でも、特別な才能をもった人でもハンディキャップを持った人でもその臍を共有することができる。それはチクセントミハリがフローと読んだ状態である。

フローの最も顕著な状態は集中である。それは強い動機となる。人と活動の間に距離がなく、何が得などの計算のない状況であり、時間が急激にすぎしていく。さらに関係する刺激に対して開かれ知覚や認知機能

がよく働いていて、他の活動はできない状況にある。言葉や考えの意味が強烈により深く理解される。満足感や身体的にエネルギーを感じている。状況によりさまざまな強度があるが重要なのは、満足が一つのソースから生まれており、内発的であることである。没頭はその人の能力にあった活動というわずかなエリア、発達の最近接領域でのみ生じる。

①没頭を測定する

しかし没頭は主観的な統制として見られてきているが、十分に信頼可能な測定ができる。レベル1活動がない、心



が不在。レベル2 注意が切れている。レベル3活動しているとよぶことができる。何かをしている。レベル4密な心的活動が生じている。

レベル5 没頭して全体として関与している。うまく活動がいかなかい事態に帳面しても気が散ったり途切れたりしない。

子どもの経験に共感できる、子どもになるような感覚をもった観察者によって行なわれることが評定過程の中核である。このことがその子どもの心的活動や彼の経験の強さについての結論を導く時の情報を与える。

求められる観察技法によらず、L I S - Y Cの信頼度は評定者間で9 と高いものである。

a 居場所感と関与の水準をあげるために

この2つの概念は研究のために有効であるだけでなく、教育の質を上げたいとおもっている実践者たちにとって大いに役立つ。多くの教師たちの経験によって、一群の熟練教師たちによって集められ体系化されたものが10のアクションポイントである。

<10の行動ポイント>

- 1 部屋のコーナーやエリアをアレンジしなおす
- 2 コーナーの内容をチェックし、魅力のない素材をより魅力的なものに置きかえる
- 3 新たなこれまで使われてきていない素材や活動を導入する
- 4 子どもを観察し、彼らの興味を発見し、彼らの志向性にあった活動をみつける
- 5 刺激を与え、より豊かになるよう関与することで進行中の活動をサポートする。
- 6 自由なイニシアチブの余地を広げ健全なルールと同意を持って子どもたちをサポートする。
- 7 子どもたちそれぞれとの関係、子ども同士の関係を探究し改善につとめる
- 8 子どもが行動や感情、価値の世界を探究できることを援助できるように活動を導入する
- 9 情緒的に問題を抱えた子どもを同定し、継続的に関与する。
- 10 発達的なニーズを必要とする子どもたちをみつけその子が問題とする分野の中での関わりを増やしていけるように関わる。

行動は多岐にわたっている。1-3は空間、素材、活動の組織化の問題である。4は教師のその環境にいかんであっているかを彼らの興味を見つけよりそこでより焦点にあったものを与えるために注意深く子どもをみることである。5の有効な大人側のスタイルは決定的要因である。6は子ども間のダイナミクスや探索欲求を利用するには子どもたちがイニシアチブをとれるような組織のオープンな形態が必要とされる。子どもが活動を選べるほど、子どもの関与水準は高くなる。7は社会的な関係であり、教師との関係だけではなく、子どもがいかにか他の子どもとによって経験しているかをすることが重要である。カールロジャーズが定義した empathy, authenticity が重要である。グループレベルでは、経験を共有し肯定的な集団の雰囲気を作り出すことが必要である。8は感情や思考、価値の探索である。それによって感情的知能と社会的コンピテンスをうながすことができる。

1から8は一般的な特徴であり、基本的なものであるのに対して、9、10は特別な支援を要する子どもたちへの配慮である。

3) Experiential な教師のスタイル

教師の関与は多様である。にもかかわらず一人の教師が多様な状況に関与する特定の個々のパターンを識別することができる。そこでそれをA S O S (Adult Style Observation Schedule) と呼ぶ。これは3つの次元から構成される。刺激を与える stimulation、感受性 sensitivity、自立性を与える giving autonomy
刺激を与えるような関与とは子どもにおける行為の連鎖を生み出すような開かれた刺激であり没頭の高低の相違を作り出すもの

である。たとえば：自分の周りのことを不思議に思うような活動が行なわれたか、進行中の活動にあった素材が提供されたか、子どもたちがコミュニケーションしたくなるような状況か、子どもたちが思考を喚起するような問いに直面したか、彼らの心をつかむような問いがだされたかが問われる。

感受性は子どもの異本的要求を共感的に理解しているような応答ができていくかである。安定感、愛情、注意、肯定、明晰、情緒的サポートなどである。

自律性を与えることは空間、時間、活動等の組織化が開かれているということだけで実現するのではなく、関与の程度によって実現される。つまり、子どもたちが相互に興味を認め合いイニシアチブをとっている感覚を大事にする。試すための余地を与える、活動をどのようにするか、いつおわりにするかを子どもたちがきめられるようにする。ルールがある状況や葛藤解決のような状況である。

教師と子どもたちの相互作用をこの次元で持ってみてみると、いかにこの次元が有効かがわかってきた。そして空間や材料、提供された活動のような他の文脈の次元よりも教師という人がより一層重要であることも明らかになる。

4) 過程志向の子どもモニタリングシステム

特別注意を要する子どもを組織的に観察するためにはモニタリングシステムが必要であるが伝統的な結果志向のシステムでは診断的な目的という価値をもっている。多くのモニタリングシステムは、学業的な達成に集中しており、成功は学習の質によるところが大きいというところがわすれられている。ただし子どもがどこに立っている

かを知ることはすぐにはいかなる行動をとるべきかがわかることではない。多くのモニタリングシステムの背後にあるパラダイムは課題を分圧して子どもがそのギャップを克服できるようにするものになっている。しかしこのアプローチは子供の発達過程の性質を考慮していないし、子どもが一人の人格として機能していることをとらえていない。

そこでEXEの枠組みでは過程志向のモニタリングシステム（POMS process oriented monitoring system）と一貫する教育過程の質についての2つの主な指標としてwellbeing, involvement をとりあげる。そこでの問いは、それぞれの子どもは今どどのようにしているのか、子どもたちそれぞれについてあらゆる重要な分野において情緒的健康と真の発達にむけて十分な努力がなされているか？ 最初の段階で5段階評定で4以下のこについてさらなる観察や分析をしていく。年に3, 4回定期的に評価することが実践化可能で効果的である。他のシステムとは対照的に、POMSは目的の感覚を与える。教師は自分の仕事ですぐにフィードバックを与えなければならぬと感じ、すぐに実行することになる。それは喜びや内発的動機をさらに与えるものとなる。

A. 深いレベルの学習という概念

EXEの理論枠組みでも教育の効果や成果へは多くの注意が払われる。深いレベルの学習という概念は教育評価への批判的なアプローチの関心事である。この中心にあるのは子どもの基本的コンピテンスに影響を与えないような、実生活に転移しないような表面的な学習に疑問をむけることである。構成主義の伝統同様、発達の過程を単

なる個々の知識要素の足し算としては捉えない。基礎となる基本的なスキーマの構造に依存したものとして考える。

この視点から5分野の発達分野を考える
(1) 身体的知識 (2) 心理社会的認知
(3) コミュニケーションと表現 (4)
創造性 (5) 自己組織化(体制化)

この文脈では知能を論理的知能とは異なるものとして捉える点が重要である。世界を真にわかるにはその世界を感じる能力が重要である。

B. 価値の教育

E X Eでは「つながり linkedness」リアリティへの肯定的志向性の発達への深い関心を示す表現である。それが価値の教育への参照点である。

エコシステムの中でのつながりというのは宗教的な概念でもある。宗教 Re-ligion(re-liare)は再びつながるという意味である。非行 delinquency はつながりの欠如を意味する。つながりの感覚は犯罪行為等の予防の試金石となる。何かとつながっているという感覚が破壊者となることを妨げる。

幼児教育のレベルでの概念にして詳しく述べれば、子どもは1自分自身 2他者 3物質世界 4社会 5完全なエコシステムとしての一体感とのつながりの態度を育てていくことを援助するのである。

C) エネルギーへの問い

E X Eプロジェクトで蓄積された経験は教師たちの質の改善に役立っている。それは彼らがすでにわかっていることへの確証となる。子どもはフローの状況にある時にその活動によって問われた分野で発達が生じる。効果変数ではなく、過程変数は介入の質にすぐにフィードバックを与えること

ができ潜在的にインパクトを与えるべき点を明らかにする。

さらに没頭を質の鍵指標にすることは肯定的な活力を生み出す。子どもの情熱的な応答がさらに教師に専門的な水準と個人的水準で深い満足を与える。専門的ガイダンスの参照点として没頭を取り上げることが教師の働きや現実の場への尊敬を生み出すことになる。経験の教育は自分が立っているところ、現実の状況から始まる。一つの行為のフィールドが選ばれることによって潜在的にそこでの居場所感や関与が増加することが潜在的に生まれる。それがいかにわずかなことであっても、この増大が成功を経験させ、次のイニシアチブをうみだしていく。つまり経験の教育は人々の中のエネルギーを引き出し促すことで、子どもたちにより深いレベルの学習を生み出す螺旋へと導き、そして大人にも深い学習を生み出していく。

2. ヨーロッパにおける SICS の活用

1) ドイツ: Ulich, M. & Mayr, T. によって2年間に夢中度尺度を使用し、また子どもの観察についての実践者インタビューと現職教育で使用している。8つのデイケアセンター28クラス625人が活動スケールで評定されている。センターでの夢中度の平均しでは男女に差はみられなかった。しかし遊びの志向性には男女差が見られ、カリキュラムや仲間同士のやり取りの中でも異なる世界に生きているということが明らかになり、保育者のジェンダーへの感受性が求め合えるということが明らかになっている。またマイノリティ民族の子どもは活動水準が低いこと、特にそれらの子どもにとってリテ

ラシーと言語において彼らの発達にふさわしいカリキュラムが与えられているのかが問題とされた。また子どもの夢中度は年齢に比例して高くなるということが明らかになった。そこから3, 4歳児での一人遊びにおいて年齢にふさわしいカリキュラムが保障されているのか、また幼い子どもでは異年齢よりも同年齢のほうがある分野ではあるのかもしれない、暗黙の年齢による規範があり、それが異年齢では年上の子と年下の子のふるまいをきめているのではないかということがありと推測されている。そしてこのような規則正しく体系的な子どもの観察を夢中度という点から行ってみることで、子どもについて新たな発見が見られることが指摘されている。ただしこのような活動は保育者にとっては日常の保育とは違う余計な仕事ととらえられがちであり、ドイツの教師文化における価値観の根本的な変革が求められるとしている。

2) ポルトガル: Nabuko, M. & Prates, S.らはポルトガルではすでに ECERS などの自己評価尺度が使用されてきていることから、子どもの夢中度を観察していくことによって実際の指導にどのような変化があるのかを見ている。ポルトガルの3つの異なる地域で計37の施設でまず ECERS を使用してベースラインを測定した後、夢中度尺度を使用して

それぞれ3, 4, 5歳各6人(男女3名づつ)計18名の子どもの活動における夢中度が観察された。そしてクラスでの自己評価し改善を図った後での各地域での ECERS スコアも測定された。すると、かならずしも ECERS スコアが高くても夢中度は高くない子どものいるクラスがあることが明らか

かになった。特に年齢が高い子の方が夢中度が高いという傾向がでており、必ずしも ECERS-R で測定される環境の質の水準と子ども達の活動の夢中度尺度で測定される水準は同じようにはならず比べることができないことが明らかになった。

また Portugal, G. & Santos, P. は特別な支援等を要する子どもをもつ困難な家庭への早期介入を行なうに際して、子どもの案震度と夢中度を捉えるとともに、大人の介入において、Laevers 教授が経験に根ざした教育における保育者のかかわりとしてあげている、子どもにイニシアチブを基にした関与(自立性 Autonomy)、豊かな環境を与える(刺激 Stimulus)、そして相手の経験を想像することによる対話の展開(感受性 Sensitivity)が子どもの安定と夢中度をたかめ、子ども自身の解放(自己実現)を可能にするということ、事例研究を通して指摘している。物語やクリティカルインシデント、ケースは理論と実践の間のある空間に焦点をあてて考えるのには大変重要であるが、教師の特徴として自分の実践へ疑問をもつのは難しい点を挙げる。そして子どもの属性や家庭、文化、学校などもろもろのことに問題の原因を帰属しがちである。しかし子どもの主体性を重視する実践と家庭への早期介入支援をする活動の架け橋として、ASOS を使って保育者自身の自己省察と自己評価を足場としていくことが有効であることを示している。この ASOS を使用することによって、子どもの反応への感受性、子どもに対して適切な環境刺激を与えているか、子どもに自立性を与えているかという視点でみることで、介入の具体的な目標を明確にするこ

とができて違った視点をえることができること、スーパーバイズする側も具体的に自立性をうながす方法の助言などができるようになることを実際の保育者の実践の語り等から示している。

3) フィンランド ; Kalliala, M. & Tahkokallio, L. らは1998年から2000年までのアクションリサーチをおこない、98年にまず自己評価をした後99年に改善計画を立て、2000年にそれを振り返るといって実施している。

4) デイケアセンターのそれぞれから4人の教師が参加し5人のターゲット児を選び、夢中度尺度を実施するとともに大人側のスタイルもASOSによって評定し、面接等を行っている。その結果子どもの夢中度は1園では完全に変化し残り3園では部分的に変化した。しかし大人に関してはそれぞれ全員が変わっているわけではない。子どもの夢中度は教師の資質によるところが大きい、しかし子ども達の集団の編成によっても夢中度は大きく変化することがわかる、

この15年間フィンランドでは、大人が中心となる教育方法は古い教育学と批判されることで、大人は子どもから距離をおき、子どもの現実を注意深く分析することもなく、介入しすぎないようにだけしてきていた。しかし夢中度の観察によって子どものことをよりきちんと彼らがとらえられるようになってきた。そのことが子どもの内面で生じていることを具体的によく理解することを生み出してきた。子どもの夢中度が高まることは大人の子どもの感受性が高まり、より子どもを刺激するような環境を準備し、子どもの側の自立性は低くなるということ

を示している。同様の英国の研究では子どもの自立性があがったのに対してフィンランドの場合には下がっている。そこには文化による相違があり、これは両国の子育ての実践や政策というマクロ部分とデイケアセンターでのやりとりというミクロ部分が影響しているだろう。英国では自立性が戦後非常に重視されてきたが、フィンランドではそうではない。いずれの国も大人の役割が明確にされずに子どもを自由にだけしておくことで独立や自律ということがうたわれてきた。しかし自立性と刺激とのバランスをその国や文化によってどのように作っていくかということがきわめて重要であることがここからは明らかになっている。

4) 英国 UK : 1993年以来4期にわたってEELプロジェクトが実施され保育の質の改善が目指されてきている。

第1期93-94年には13の施設、52の保育者と390人の子どもたちで保育の質評価のシステムが作り出され、第2期94-95年には9の地域でさらに200の施設、800人の保育者、6000人の子どもを対象にし、質の評価の改善と方策が検討された。そして第3期の95-96年にはさらに500の施設、2300人の保育者、15000人の子どもを対象にしてデータの収集が実施され、第4期96年以来国家プロジェクトとして実施されてきている。

質の評価と改善の段階としては「1評価-2行動計画-3改善-4省察」の段階が想定されており、この1の子どもの評価において夢中度評定尺度が使用され、保育者のあり方については保育者の関与尺度ASOSが使用されている。

大規模な数量調査結果からは、研究の結果として大人の関与には明らかな階層的関係が見られ、子どもへの感受性が子どもとの教育的やりとりの基盤となる前提条件であり、大人と子どもの間の感受性と応答性が形成されるとそこで環境としての刺激が意味のあるものとなる。そして自立性（子どもにどこまでイニシアチブをもたせて自由にさせるか）こそ効果的な教育においてもっとも挑戦的な側面であり高次な教育技能であると判断される。感受性は多くの施設の保育者において高い水準にあり、市の認証評価をもらっている園のほうが無認可施設よりも感受性は高いなど施設別の感受性が占められている。

しかし全般に自立性において比較的低い水準にある。このような教育研修の効果は資格のない人ほど顕著に現れるといったことも示されている。また実際の評価やアクションプラン、それによる改善の過程について Pascal, C. & Bertram, T. (1997) に詳しく記されている。

以上、上記国際的動向から、この SICS のうち、幼児期においては夢中度尺度が保育者の観察眼を高め、資質向上にも寄与することが示唆される。そしてそのためには夢中度だけではなく、さらに ASOS という保育者側のかかわりへの省察も今後さらに検討していくことが必要であることが示唆される。

英国の研究でも記されているが、評価後の改善にはそれなりの時間を有し、特に子どもの変化に比べて保育者の変化はより時間がかかること、しかし好む中度によって環境そのものの質の変化には効果があることも期待できる。日本におい

ても、英国とフィンランドで違いがあったように今後比較を台湾とすることでわが国の保育における特徴をこの尺度を用いることで明らかにしていくこともできるであろうと予想される。

3 SICS 以後の展開

SICS の着想はベルギーにおける pre-primary school の幼児教育段階から始まっている。しかしながら夢中度尺度にもとづく観察の視点を活かし、小学校や中学校版として、PALE (Process-oriented Analysis of Learning Environment) として開発され実際に小学校や中学で使用されてきている (Laevers, 2007)。PALE においても案震度と夢中度という子どもの視点が中核にあり、子どもがどのような心的活動にとりくみ、他者と相互作用しているかが問われる。そして没頭に影響を与える要因として、集団の風土と関係、発達の水準にみあっていた刺激、子どもの活動水準、複雑な現実へどこまで迫っているかというリアリティ度、子どものイニシアチブの余地によって決まると考えられている。そして教師側のスタイルについては保育同様に、どれだけ知的刺激を与える関与ができているのか、子どもの経験への感受性、生徒のイニシアチブ、自立性の提供という3次元で決まると考えられている。そして具体的な各時間の授業の展開とさまざまな現実の文脈要因および教師の経験と知覚によっても影響を受ける。

ベルギーフランダース地方は英国とカリキュラム等は変わらないにもかかわらず学力が高く、その要因は子どもの授業中の夢中度の高さ、その質にあるとも言われている。

SICS の夢中度と同じ理念で、18歳までのすべての教育の質の評価と改善を実際にアクションリサーチとして進めていることが来日によって詳しく知ることが出来た。

したがって今後このPALE等も射程に入れながら、保幼小連携における保育者、教師の交流の視点としても保育所のための日本版SICSの開発をしていくことが可能であろうと考えられる。

D. 結論

SICS、中でも夢中度尺度を使用した幼児への研究はヨーロッパでは盛んに利用実施され、複数回の使用によって事前評価—改善—事後評価スタイルで、本尺度が質の改善に有効であることがベルギー以外の国でも明らかにされてきている。また同時にこれは保育者の実践の省察や資質向上に対しても一定の効果を持ちうることを示されていることが明らかとなった。

ただし同じ尺度を使用しても、国によって改善の方向性等には違いが見られることも明らかになった。

またSICSは乳幼児にとどまらず、就学後段階の教師とも連携使用していただける可能性もPALEという尺度からは示唆される。

日本ではまだ日本版SICS 幼児版を作成したばかりであるが、今後この尺度をすでに実施している諸国に学び自己評価に役立てていくこと、そしてそれを研究によって実証的な証拠を示していくことの必要性が考えられる。

引用文献

Kalliala, M. & Tahkokallio, L. (2003) The adult role in Finnish early childhood

education and care. In Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. pp93-110.

Laevers, F, (1998) Understanding the world of objects and of people: Intuition as the core element of deep Level learning, International Journal of Educational Research, 29, 69-86.

Laevers, F, Bogaerts, M. & Moons, J. (1996) Experiential education at work: A setting with 5years old. Manual. Leuven:Belgium CEGO.

Laevers, F., Vandernbussche, E., Kog, M. & Depondt, L. (1997) A process-oriented child monitoring system for young children. Leuven:Belgium CEGO.

Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. pp. 189.

Laevers, F. (2007) PALE. A Guide for a Process-oriented analysis of learning environments. Leuven: Research Centre for Experiential Education.

Nabuko, M. & Prates, S. (2003) Improving the quality of early childhood education from within. In Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement

- of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. pp43-60.
- Pascal, C. & Bertram, T. (1997) Effective early learning: Case studies in improvement. London: Paul Chapman Publishing.
- Pascal, C. & Bertram, T. (2003) The quality of adult engagement in early childhood settings in the UK. In Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. P77-92.
- Portugal, G. & Santos, P. (2003) Enabling and empowering early intervention professionals. In Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. P129-142
- Ulich, M. & Mayr, T. (2003) Implementing the involvement scales in Germany day care centres: Practitioners perspectives, theoretical issues, empirical findings. In Laevers, F, & Heylen, L. (Eds.) (2003) Involvement of children and teacher style: Insights from an international study on experiential education. Leuven:Leuven University Press. P25-41.

SICS のキー概念

Well-Being = 安心度

らしさ・安心・ここちよさの度合

Involvement = 夢中度

ひと、もの、ことに心はずませてかかわる度合

SICS manual pp. 7-11

Well-being : 安心度

「水を得た魚」：子どもが心地よくいる状態を表す。子どもはこの状態を様々な様相をもって表現している。

楽しみながら

子どもの安心度は、子ども達が、楽しみ、おもしろがり、喜びながら他の子ども達と一緒に活動している姿に最もよく表れている。子ども達は絶えず幸せそうに、笑顔を浮かべ、笑い、話し合ったり、歌を歌ったりしている。

リラックスして心が落ち着いている

心地よく感じている子ども達は、恐れるものがなくリラックスしている。表情も柔らかく、緊張感や不安定さは見られない。筋肉が緩和している感じである。

元気いっぱい・躍動感

子どもの安心度は、体力や元気よさにも表れる。それは子ども達の表情からも読み取れる：生き生きとしていて表現豊かである。キラキラと輝いているように見える。身体の動きや姿勢からも見てとれる：身体が縮こまっておらず（肩もいかっていない）姿勢よく、のびのびと動いている。

心が開かれた状態

心地よく感じて生活している子ども達は、身の回りの環境に心が開かれた状態である。どのような事態も経験しようとする面持ちである。また、他の子ども達に対してもかかわり接することができる。他者からかかわりをもたれることにも幸せを感じる：ハグされたり、褒められたり、慰められたり、励まされたり、助けられたり。